平成 27 年度　発達障害理解推進拠点事業
成果報告書（概要版）

実施機関名（神戸市教育委員会）

1. テーマ

すべての児童生徒が学習に参加し，学力と自己肯定感を高めることのできる授業・学級経営等の実践研究

2. 問題意識・提案背景

指定校 4 校園はともに神戸市H区にあり、兵庫くすのき幼稚園から全員ではないが、兵庫大開小学校と水木小学校へ、さらに兵庫中学校へ進学する。神戸地域においてこの地域は下町の雰囲気のある校区で、繁華街とも隣接している。生活環境としては共働き家庭が多く、幼稚園や学校が担う役割は多岐に渡っている。そのような環境の中、学力や学習の習慣が定着しにくいケースも多くみられ、中には二次障害につながることもある。

拠点地域をこの地域とした理由としては、これらの困難さを多く抱えながら、教職員の努力でこれまでやってきた学校が、その取組のねらいや支援のあり方の効果やよさを再認識するとともに、特別支援教育の視点を取り入れることにより、より子供たちにフィットした形での支援が可能になるのではないかと考えたからである。

3. 拠点校について

○　拠点校一覧

設置者	学校名
神戸市	神戸市立兵庫（ひょうご）中学校
神戸市	神戸市立兵庫大開（ひょうごだいかい）小学校
神戸市	神戸市立水木（みずき）小学校
神戸市	神戸市立兵庫くすのき幼稚園

○　理解推進地域内の学校一覧

設置者	学校名
神戸市	神戸市立兵庫（ひょうご）中学校
神戸市	神戸市立兵庫大開（ひょうごだいかい）小学校
神戸市	神戸市立水木（みずき）小学校
神戸市	神戸市立兵庫くすのき幼稚園

4. 拠点校における取組概要

(1) 神戸市立兵庫大開小学校

①事業開始前の現状・課題

子供たちがうまく学習に向かうためには、まず姿勢を保持することから取り組む必要があると考え、行進指導などを全校で取り組んできた。また、児童の現状を巡回相談の先生に見ていただき、客観的に児童の特性をとらえ、個別での声掛けや対応、学習方法の改善など指導をしてきた。しかし、学級集団として授業そのものに活かしていくことにはなかなか結び付けられなかった。そこで、教育の基礎となる国語科における授業のユニバーサルデザイン化を図り、どの子も参加でき、その子なりに力がつく授業の組み立てが必要だと考えた。

②現状と課題をふまえた実践

意欲的に学習に取り組めるために、まず聞き間違いや聞き漏らしなどを改善するアプローチを全校で取り組んだ。体づくりを重点的に取り組み、姿勢保持ができるように行進指導やラジオ体操など全校で取り組んだ。低学年では、正中線交叉や眼球運動など遊びの中で仕組んでいる。授業では全員が参加でき、学習意欲を高めるために授業のユニバーサルデザイン化の手法を取り入れ、学習の焦点化・視覚化・共有化を授業の中で意識した。教員や教員補助者は児童のよい行動に注目し、些細なことでもほめ、自信をもって学習に取り組めるように心がけている。

近隣の幼稚園保育所や中学校とも課題を共有し、同じ視点でそれぞれの発達段階に合わせた取組を実践している。これらの取組の結果、保健室の来室数が減り、校内での怪我の数も激減した。

(2) 神戸市立水木小学校

①事業開始前の現状・課題

・全体的にコミュニケーション能力不足、生活経験の少なさが目立つ。
・外遊びが好きな元気な子供たちだが、うまく体をコントロールできているとは言えない。
・指導困難な児童でも学校が好きで、あまり欠席しない。

②現状と課題をふまえた実践

体つくりに力を入れ、行進、ラジオ体操、昼の体操、全校縄跳びなどを計画的・継続的に実施している。今年から、学習に向かう体をつくるために、昼の計算チャレンジの前にテレビ放送での体操を始めた。研修では、巡回相談での「言葉の学習が必要」という助言を意識した「ペアトーク」「グループトーク」や、授業参加率を意識した「導入の工夫」「グループワーク」を取り入れた授業研究を行った。国語の授業研修では、講師の先生から、学習指導要領に対応させながら、「国語の力」＝指導事項であること、言語活動を通して身につけさせることを学んだ。また学期ごとに授業改善に向けて話し合い、課題を明確にした。これらの取組により、教職員が生活面では「あいさつ」を、学習面では「聞く」に焦点を絞り、継続的に授業づくりや学級での指導に取り組んでいる。

(3) 神戸市立兵庫中学校

①事業開始前の現状・課題

学校としては、今後、生徒にどのような働きかけが適切か、どういった支援が必要か、生徒たちの授業の参加意欲を高めるためにはどのようにすれば良いか、を課題としてきた。今年度は、

授業後にその日の生徒の状況等を連絡カードとアドバイスシートで振り返りをした。毎回、まとめて冊子にし、学年や名前があがっている生徒の状況など回覧などで確認して情報共有を行った。また、気になる生徒が出てきた際に、その日のうちに担任との情報交換を行った。教職員には、支援員が行ったアプローチの失敗例や成功例など、参考にするように冊子は全員に配布した。支援員が頻繁に廊下や職員室に出入りすることを共通理解した上で、余裕がある時などに声かけなどをしてもらい、巡回も情報交換もスムーズにいくように促した。

②現状と課題をふまえた実践

気になる生徒に対し行ったアプローチや支援を記録し、それに対し生徒がどう変化したのかということを細かく時系列で記録することを促している。

授業の中で、教師や教員補助者が気づいたこと、少しでもできたことをほめる。この繰り返しによって問題行動の改善に繋がった。学校の中が落ち着き、教師の大きな声が消えた。この現状は当校にとっては非常に大きな変化である。

5. 主な成果

幼・小・中学校が児童生徒の様子を特別支援教育の視点から実態把握を適切に行うことによって、今学校として必要な支援や取組は何か、を明確にすることができた。さらに、それを学校間で共有し、共に取り組めることは取り入れたり、その取組を活かして次のステップを設定したりするなどすると、非常に効果的な指導につながることが実感できた。常日頃から指導の工夫が必要であった、この度の拠点地域で、特別支援教育の視点を取り入れることの効果が大きく表れたことになる。これらの実践を管理職研修や教職員研修等で積極的に発信し、特別支援教育コーディネーターを中心に、各校の実践に結び付けることができるようになってきた。今後も積極的に発信し、学校の取組のモデルとして他校にも広げていきたい。合わせて本事業での取組や成果を凝縮してまとめの冊子を作成した。4 月当初に神戸市全校種、全教員に配布予定である。特別支援教育の視点で児童生徒を見つめ、一人一人の安心や自信につなげることができるよう、職員研修等での活用を呼びかける。

さらに授業のユニバーサルデザイン化モデル校を 28 年度から指定する。既存の事業と結びつけ、焦点化・視覚化・共有化をキーワードに研究を進める。特別支援教育の視点で子供理解をより一層深め、誰もが「できた・分かった・やってみよう」につながる授業実践を推進する。

7. 問い合わせ先

組織名：

(1) 担当部署　神戸市教育委員会特別支援教育課

(2) 所在地　神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号

(3) 電話番号　(078) 322－5788

(4) FAX 番号　(078) 322－6159

(5) メールアドレス　yuka_torikai@office.city.kobe.lg.jp